

# 犬の肺

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会提出標本No.459



動物：マルチーズ、雄、2歳、体重3.4kg。

臨床事項：1985年11月21日、本学家畜病院に重度溶血性貧血を主徴として搬入。9月に交通事故、10月元気消失、11月に2ヶ所の開業医でバベシア症、自己免疫性溶血性貧血が疑われ治療された。可視粘膜蒼白、脾腫、血色素尿、尿蛋白<sup>++</sup>。血液所見はRBC57万/mm、Hb1.2g/dl、Ht7%、白血球17,900/mm (Band12%、Seg68%、Ly6%、Mono10% (大型幼若球を含む)、Eo4%)、血小板数 $2.7 \times 10^4$  (大型血小板)、赤血球は大小不同、ヘルメット型の赤血球や赤血球破壊産物も見られた。血中尿素窒素21.92mg/dl、総蛋白量7.5g/dl (A138、 $\alpha$ 8.1、 $\alpha$ 19.6、 $\beta\gamma$ 31.2g/dl) フィブリン分解産物土、11/12、-12/12に交差試験適合血液を5回輸血。12月7日から黄疸を呈し、14日PM0:00斃死、PM2:30病理解剖。

肉眼所見：肺全体に大豆大からえんどう豆大の出血が多発し、右肺後葉に直径3mm程度の栓塞を認めた。両側後葉は、浮腫を呈していた。脾腫が著明で肝臓は黄色を帯び小葉像明瞭であった。骨髄は退色髄様で量的に乏しく脳髄膜にも出血を認めた。少量貯溜していた胸水から *Serratia Marcescens* が検出された。

組織所見：肉眼的に見られた肺の栓塞は器質化していた血栓性栓塞で(図1×40)、PTAH (リンタンゲステン酸

ヘマトキシリン) 染色では器質化していない部位が陽性に染まった。その他比較的小さな血管にもフィブリン血栓が認められた。また、全体に浮腫、所々出血を呈し、巨核細胞が多数出現していた(図2×400)。肝臓は小葉中心性にび慢性の壊死とうっ血が見られ、更に巨核細胞が出現し、髄外造血像が見られた。ジヌソイドにはPTAH染色に深青色に染まるフィブリン血栓が、比較的広範囲に見られた。脾臓にも、かなり多数の巨核細胞と幼若な骨髓性細胞が出現する著明な髄外造血像とヘモジデロージスを呈し、脾洞にもPTAH染色陽性のフィブリン血栓がみられた。骨髄は線維症を呈していたが、造血像もみられた。脳髄膜の血管にも器質化血栓がみられ、心外膜にも血栓と軽い炎症がみられた。腎臓には血栓はみられず、糸球体の分業化とPAM染色で基底膜の肥厚が認められた。

肺、肝、脾の3臓器にフィブリン血栓が認められたことによりDICと病理組織学的にこの症例を診断し、提出標本は“肺動脈の器質化血栓”とした。その他、肺の出血、肝臓の壊死、脳髄膜の出血等DICにみられる際の所見が得られ、貧血は末梢血管で赤血球が機械的に破壊されるためにおこると考えられた。